

第4章 丁石順礼古道

本章は図-1中の「Q・丁石古道」を取り上げる。P1とP2の間には九十六丁約10.5kmに亘って里程標（距離の目印）としての丁石が安置されている。

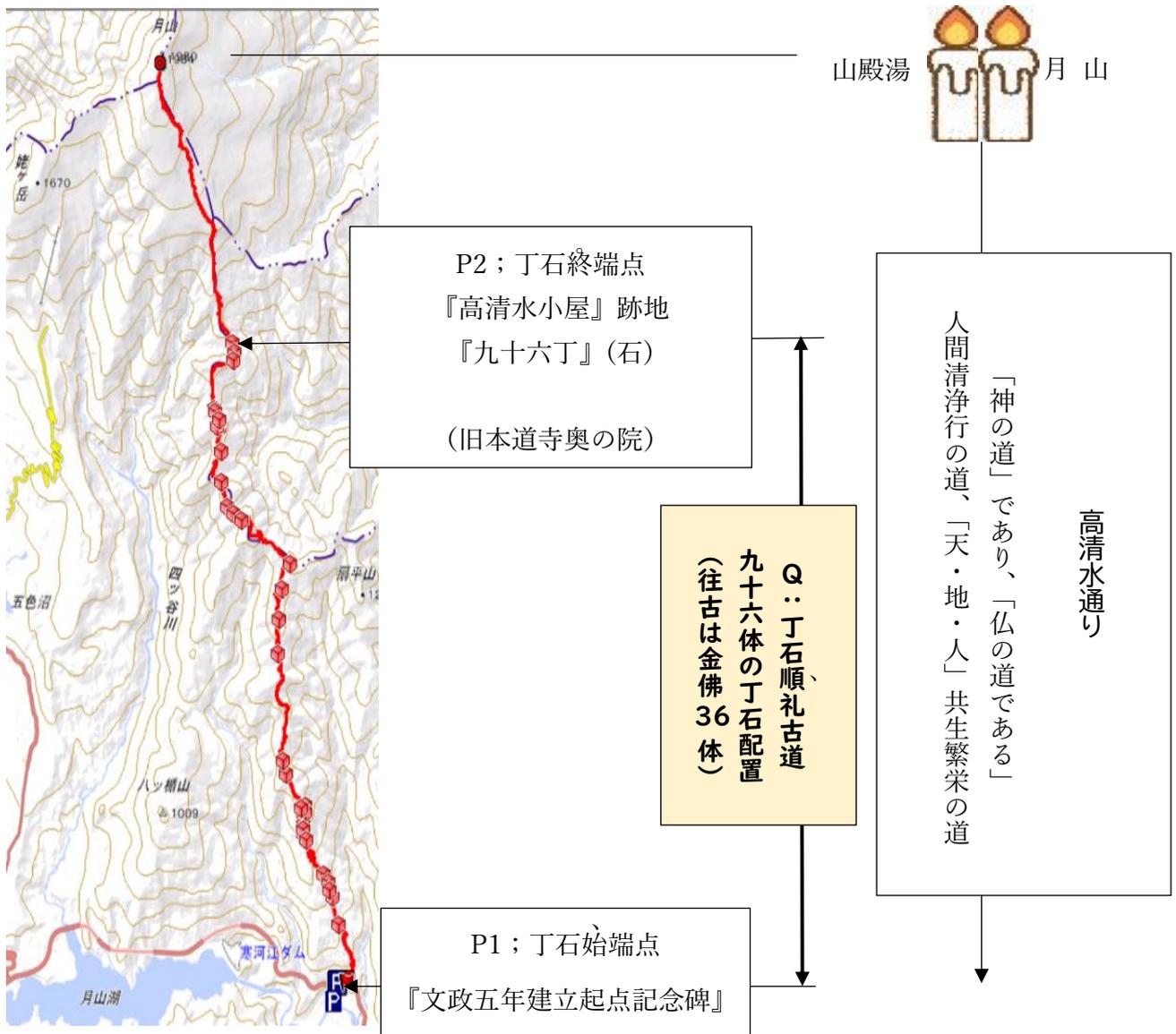


図-1

1. 丁石配置

(1) 形と大きさ

2022(R4)年11月末現在で把握している現存数は全96体中30体(全体の31.2%)である。その細部は別記しているが、概略は図(表)-2のとおりで、材質は河原石(花崗岩の自然石?)と見ている。個々の大きさと重さの推定概算値は別記したが、平均値は図(表)-3のとおりであり、全体が縦長の丸みを帯びた形でとてもシンプルである。



図(表) - 2

項目		加重平均	最大値	最小値
大きさ (cm)	高さ	48	56	41
	幅	28	38	21
	厚さ	10	15	7
重量 (kg) ?		30	68	13

図(表) - 3

(2) 刻字に要した日数

2022(R4)年 11月 25日 (金) 山形市内の石沢石工——石工の現代名工と称される長老——に五十九丁(石) 他の写真を見せて鑑定して貰った処、“ 非常に硬い花崗岩の様に見える、深く丁寧に彫っている、現在の機械堀で1体に半日はかかる、200年前の道具を想像すると1体に1週間近くは要したのではないか。”という話であった。ここでは仮に、起点記念碑は2体分と見做して、各丁石に最低でも平均6日間要したとすれば、全体(延べ)では6日×98(96+2)体=588日、1年半ほど掛かったことになる。

(3) 丁石と参詣人との精神的相互往来

人と神との密接な相互関係について端的に記述したものがある。貞永元(1232)年制定された「御成敗式目」——鎌倉時代に、武家社会での慣習や道德をもとに制定した武士政権のための法令(式目)——の冒頭にあるので、「<http://hgonzaemon.g1.xrea.com/>」より図(表)-4に抜粋した。なお、全51条からなるもので、その数は17の3倍で、聖徳太子の憲法17条に由来とされている。

<p>一 可修理神社専祭祀事 右神者依人之敬増威、人者依神之徳添運</p>	<p>第一条 神社を修理し、祭祀を専らにすべき事 右、神は人の敬ひによって威を増し、人は神の徳 によって運を添ふ</p>
---	--

図(表) - 4

日本に仏教が伝来したのは、6世紀半ばの欽明天皇の時代（日本書紀によると552年、元興寺縁起などでは538年）だが、その後、推古天皇12（西暦604）年に聖徳太子によって制定された十七条の憲法においては「二に日く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり。」と仏教が取り入れられ、やがて、日本古来の神祇信仰に仏教が混淆し、本地垂迹思想——神は仏を本地（真実の身）とする垂迹（仮の身、権化）に発展し、複合化した独特な信仰形態が明治の神仏分離まで続いて来たのである。現代の私達には俄かに理解しがたいが、日常、非日常においても、人間と神仏の密着・密接な相互交渉関係——感応道交が社会構造全般に影響して来たという歴史があった。現代のように文明が発達していなかった時代にあっては、いわゆる飢饉が短サイクルで頻発した時代ではなかったのか。そうした中では、平穩無事、五穀豊穰、照雨順時を願わずにはおられず、結局は人智を超えた神仏にすぎる他はなかったことだろう。そのような世にあって、そのような思いがあって、九十六丁石の建立に意を決したのではなかったのか。

入魂儀式・開眼供養を挙行した（第2章の2）からには、丁石は単なる道しるべ・目印・道標としての石ころではない。神仏混交隆盛の時代であるからは、三山参詣者の安全歩行見守りとして（向こう側からこちらへの視線）の鎮座、登拝行者・行者の先祖供養の心（こちらから向こう側への視線）を受け止める役割を担った神様・仏様の存在——（簡単には石仏）として、祀り・祀られる存在になったのであろう。神威仏光の発信基地であり、崇仏敬神（祈り・祈願）の受容器であり、合わせて靈魂石である。行者の登拝者と神仏を結縁する仲介者になったのである。幸いにも、起点記念碑には発願主（プロデューサー役）の里先達・山先達と支援スタッフとなった世話人の五人の氏名が明瞭に残っている。さらには、各丁石に寄進者名がほとんど残っている。

一部には、刻字に朱色ベンガラがはっきりと残っているものもある。全部だったのか、裕福な人だけが塗ったのか、どうだったか。表に現れた30体全部の『丁』の刻字が明瞭であり、みんな細長のスマートな形である。200年の風雪に耐えて、凜として鎮座している孤高の美しい姿を感じる。「山椒は小粒でもぴりりと辛い」の姿である。

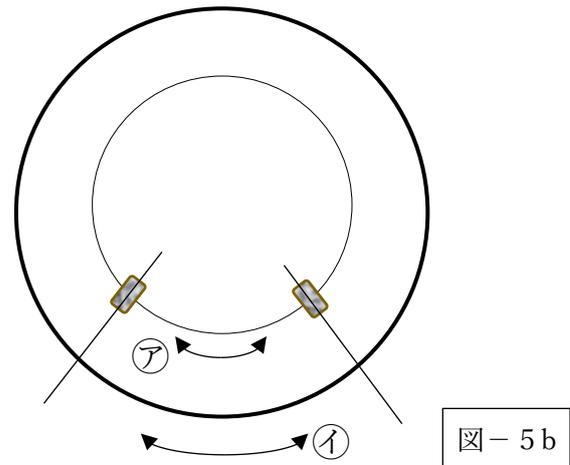
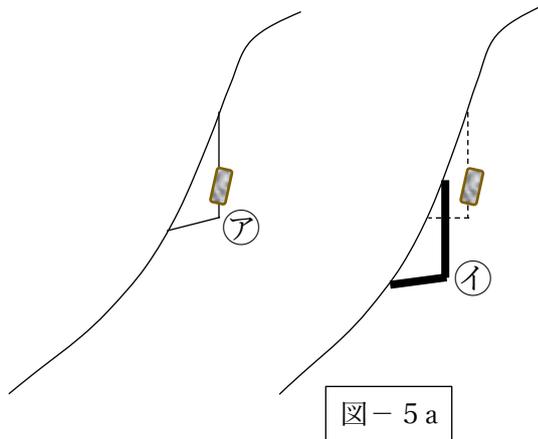
（4）丁石の有無と丁石間隔

起点記念碑から最終の九十六丁所までの距離は、 $96 \text{ 丁} \times 109 \text{ m/丁} = 10,464 \text{ m}$ で、現代の科学を以ってGPS機器で測定すると10,530mでほぼ一致する。余りにもぴったりで驚いてしまう。九十六丁（石）の所で一丁間隔の平均は109.7mであり、理論値（1丁=109m）とほぼ一致する、ぴったり一致と表現出来る。0.7mは計測誤差の範囲内だろう。

一方で、細部を見ると、例えば、十三丁（石）では起点からの平均では106.8m（基準値比-2.2m）、三十四丁石で114.7m（基準値比+5.7m）と他と比較して乖離が大きくなっている。また、連続している八十四丁～八十七丁間をみると起点からの平均では110.9m、110.5m、110.6m、109.7mであるが、現地の相互間隔では79m、118m、30mと極端な処もある、最終九十六丁（石）の所では平均値で109.7mなのに、どうしてこのような大きなアンバランスが生ずるのかという疑問が湧く。要因を考察する。①転げ落ちたものを上げたものもある。②踏まれた道型があちこちにあり、ルートは少し移動した可能性がある。③過去にはブナ樹木運搬のための荷車通行に供するように道を削り取った可能性がある。これら3点の要因が0.7mの誤差に繋がったものと見ている。

さらに、もう一つ大きく係っている要因があると見ている。図-5～道を傾斜面に付けていることから、どうしても、④経年で下へ下へと押しやられることになり、すると、丁石は動かないとすれば、当然、歩き道の中心線は長くなっていく。

また、④の状況においては、丁石は置き去りにされた様相となり、より発見し難い要因になっているものと考えている。また、一部に相互間隔で109mと大きな乖離となっているのは、寄進者（施主）の思い・希望があって、均等間隔を無視し格別の霊力を感じた地点に安置したのもあったことだろう。



（5）丁石の新規追加設置や間隔調整は行わない

2022(R4)年9月10日（土）に「九十六丁」を発見した前日までは20体の現存を確認していたが、この日以降探査の努力が実り、2022(R4)年11月末までに新たに10体を発見し、現在合計30体を確認している。しかし、残りの66体は努力のいかにもなく他はなかなか発見に至っていない。

？1；すると、新規の追加設置を検討したらどうかという声を持ち上がる——魔が差すのは当然のことだろう。

？2；次に丁石間の間隔についても問題意識が出てくる。前記のとおり、個別間をみると、一部に109mとは長短比較的大きく乖離した処もある。すると、均等になるように間隔調整を検討したらどうかという声を持ち上がる——魔が差すのは当然のことだろう。

しかし、新規追加設置や間隔調整の是非を論議するのは構わないとしても、安直にいじることは、捏造・偽造の世界である。200年前の当時関係者を冒瀆する、踏みにじるものである。当時の寄進奉納者——起点記念碑に名のある5人を除けば、そんなに裕福でもない百姓身分の人達——の思いを最大限に尊重し、私達の代としては発見時のそのまま保全していくという基本姿勢を堅持すべきものと考えている。2022(R4)年の単年で10体も発見したのである。必要なのは、丁石発見に係るイベントの内容を工夫充実していくことだと考えている。96体全数の現存確認が成った処で、それらを検討するのであれば、100歩譲って理解を示すことはある。

（6）GPSによる位置特定

DAN杉本氏開発のパソコン用「カシミール3dスーパー地形」ソフトにインストールした「山旅倶楽部」アプリ、およびスマートフォン用「スーパー地形」アプリを活用し、国土地理院地形図（電子国土WEB）に記録したトラックログ（歩行軌跡）と特筆すべき把握点^{ウェイポイント}を以って、丁石の位置を特定し、GPS電子データ（緯度経度、時刻）を保存している。その位置の枝等には、ピンク（赤色）のテープとブルー（青色）のテープを絡ませてぶら下げている。なお、経年劣化が予想され、折りに触れて取付け直しが必要であろう。平成10年8月22日の登山時に、「10、19、42、78、82」丁を確認したとの記録（メモ）があるものの、2022(R4)年12月1日（木）時点で、確認出来ずにいるが、本件前記の措置により今後はこのようなことは起きないものと思っている。

(7) 丁石の産地

今は想像するしかない。図-6において旧本道寺の直ぐ下手に門前宿坊街があり、目の前には寒河江川がある。今もそうであるが、丁石類似の川原石の宝庫、産地である、おそらくここの石を使ったのではないかと想定している。



図-6

(8) 『順礼』とした理由

一般的には順は巡として巡礼とするが、里程標丁石の意味合いに鑑みて、自然数理に基づき順序良く配置したことからは、その丁石と対面しながらの参詣道という点から『順礼』と呼称付けしたものである。

2. 丁石奉納設置に至った地勢的背景（成り立ち）

何らかの時代背景や事情があって、このような丁石寄進奉納事業が持ち上がったにせよ、30丁^(体)（体）とか、60丁^(体)でも良かったかもしれない、しかし、九十六丁^(体)にした——成ったというのが正しい表現なのか。一番素朴な疑問は、月山まで約14kmある高清水通りの中で、**なぜにその地点、その区間なのか**ということ。「九十六」という数字に拘ったのには理屈はあったにせよ、それは人為である。しかし、あの全体地形を人間が造成した訳ではない。

すると、その答えはいとも簡単である。

〔 P1・丁石始端点／『起点記念碑』と
P2・丁石終端点／『高清水小屋』跡地・『九十六丁』（石）と
Q・その間に丁石を配置した道の

3点セットには、人為を許さない自然界の地勢的・霊的な必然性があったのである。

まずは結論的に言えば、このような全体地形そのものは、当然であるが、地球創成時、天地初めて拓あめつちけし時に、日・月・星が住まう天がこの地を選定し、神かみほとけ仏を分身させて写し込んだ自然造形であり、天地の胎動が生んだ必然である。人間が人工的細工を施して造った地形では無いということをしかりと抑える必要がある。

「P1・丁石始端点」の特徴は、

第2章の1 丁石始端点（1）／起点記念碑発見と位置検証

第2章の2 丁石始端点（2）／起点記念碑の奉納関係者

に記述したとおりである。すなわち、旧本道寺は参詣者心の基点、精神的支柱塔立点であり、かつ、本通り道の基点・今でいう道路原標打点地であった。

「P2・丁石終端点」の特徴は、

第3章の1 丁石終端点（1）／『九十六丁』（石）発見

第3章の2 丁石終端点（2）『高清水小屋』跡地と周辺

に記述したとおりである。

さて、このP1・P2・Qの3点セットを特別の空間と認識するに至った時間的経緯は次のとおりである。

{ 以下、往時にワープした気分で記述 }

西暦809（大同四）年8月8日に旧本道寺が開かれた。その後、しばらくして（まもなくして）、本通りが拓かれた。

月山・湯殿山参詣者の往来に伴い、後に丁石終端点となる『高清水小屋』跡地（今でいう『元高清水』）に現れた（宿る）次の特殊性に気付いた。

- ✓1；本通り山道の傾斜地勢において、P2点（以下「当地」という）より先は、背丈の低い樹木から灌木地帯に変化し、ここより先は月山頂上まで登り一辺倒の急坂となる。
- ✓2；当地が骨太尾根筋一直線山道中で最も幅が狭く、両側東西から二つの河川がわずか約35mを挟むように、その源流部が当地に迫って伏流水が湧出している。
- ✓3；当地の目前は地理学的に月山全体地形中の断崖絶壁（浸食壁・構造運動の影響）になっており、眼前（視野）に鉾山・鉾石・鉾脈・鉾床の露頭が現れている。（なお、鉾石は古来『神足』と称された。）

これらの地理的特徴の場所に鑑みて、本通りにおいて、当地は自然界の霊気漂う特別な空間域の一つと感得された。

そして、奥州平泉秀衡公の奥方がこのQ・古道区間に計36体の金佛を、当地には6体を寄進安置した史実——寄進うんぬんは西暦1639（寛永十六）年、1683（天和3）年の西川町史に載るが、平泉町世界遺産推進室のHPによれば、秀衡の時代は1159（平治元）年～1189（文治5）のこと、したがって、現地寄進は秀衡のその時代であろう——がある。いわば、神仏霊気の漂うものを当該約10.5km区間に印しるし付けたことにより、神威仏光力が増強される参詣道になった。

時代が進む中で、旧本道寺の関係者は、次のことにも気付いた。“このような靈氣漂うセット空間は、今（この時）始まったことではなく、今、感じたことが初めてではなく、いやいや、往古より、つまり、旧本道寺が開かれる以前から感得されて来たのではないか。・・・”。

そうして、参詣者の往来が増加するほどに、そのような過去の歴史を踏まえて、1683（天和3）年時点で、**当地を「旧跡」と称し「神躰明鏡」と形容し崇め祀り、湯殿山に次ぐ聖地「本道寺奥の院」と通称していた当地 P2 が自然的に決まったのだ。**文字に記したのはこの時代にしても、会話の中では古来この言葉が使われて来た。

時が過ぎ、長い往来の期間を経れば、旧本道寺から当地までの距離が気になるのは当然のこと、自ずと経験的に（概略測定したにしても）九十六丁前後の距離は分かって来た。このことも、道が開かれて間もなく、古来、会話の中では認識されて来たはずだ。人間は自然界から靈氣・靈力を貰うだけでは無く、逆に、参詣行者の祈りの宗教的感覚を、神仏畏敬の精神をこの道に刷り込で来たのだ。

そして、いよいよ——1822(文政五)年の至近年前から——丁石奉納安置のことが持ち上がり、果たして、どこまで安置するのか、何体を安置するのか、**始基点（起点）**はどこにするのか、**終基点**をどこにするのか、・・・関係者が相談・協議した。

終基点を、古来「旧跡神躰明鏡」の地と伝承されて来た今で言う「元高清水」の地にするという希望は皆の直感であった。前記のとおり本道寺から当地迄の距離は九十六丁前後というのは自明の理であった。ならばその始基点の位置を詰めることになり、別記のと通りの「道路原標打点地」（第2章の1）そ

の**起点地**を特定し、結果、その位置に文政五年に**1822**に**起点記念碑**を建立した。

時代の流れを重ねる中で「天地人」三位一体——神仏の靈性、自然界、人間が混然となって、三者が必然的結合(因縁果)を以ってこのような時空（時間と空間）が醸成されて来た。それらが人的交流の中で伝承して来たのだ。例え地理・地形・地勢が先行した——自然造形と雖も、これだけの大事業をするからには、ち密な計算の上で考え抜いた末に、その実施目的・理由を明らかにするために、また、諸々のコストの必要性を説くために何らかの意義付けを図ったはずである。その意義付けは後付けであろうとも、自然が別記したとおりの数理聖性とも合致することになったのである。

このように人間が認識するに至ったことは、自然の生せる技を最大限尊重した結果である。

.....

始終両端の P1・P2 と区間 Q の 3 点セットにおいて、どちらかの先後では無く、天地が成した自然造形なのである。鶏が先か、卵が先かの堂々巡りで片付く話では無く、偶然という軽薄な言葉では片付けられない、あるいは、本通りにおいては偶然も必然と裏腹紙一重であったということである。

3. Q 区間と『三』繋がり

(1) 前段要件／図(表)－7・8・9

羽黒修験でいう三関三渡さんかんさんどとか、湯殿山側法流の三山三宿の解説ではない。本通り行者の修行精神に係る推察である。地勢的に大きくは地理的 3 ゾーンの特徴を有する本通りに分け入った行者は身を白衣で包み、姥像等石碑群、元高清水を通過して、その先、横道よこどうから湯殿山へ、あるいは月山越えで湯殿山御宝前を最終目的として目指したのだ。この丁石順礼古道における九十六体の丁石や往古は金佛 36 体の配置に鑑みて、三つの精神的関門を潜り、M1～M6 六つの聖地に結縁しながら外護摩修法やら内護摩

ねんじゆ 念誦を通して、身口意の三業を、貪・瞋・痴の煩惱三毒を、三世の禍事・罪・穢をまがごと 濯浴そうよくしゃじょう 灑浄 せんとして

山先達に導かれて歩いたことだろう。その姿を密教法具の一つ「三鈷杵」に重ねた三鈷杵修行でもあったかもしれない。その三鈷杵は次の特徴を持つ方角である。

- ・密教では人間の心中にある煩惱を滅ぼす象徴としての武器
- ・三鈷杵は行者と大日如来が合一するための法具
- ・行者の身口意の三業は大日如来の身口意の三密に繋がる

---	天	地	人
関門	I	II	III
三業 <small>さんごう</small>	身	口	意
煩惱三毒	貪	瞋	痴
時空	現在	過去	未来
---	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ



図(表) - 7

図 - 8

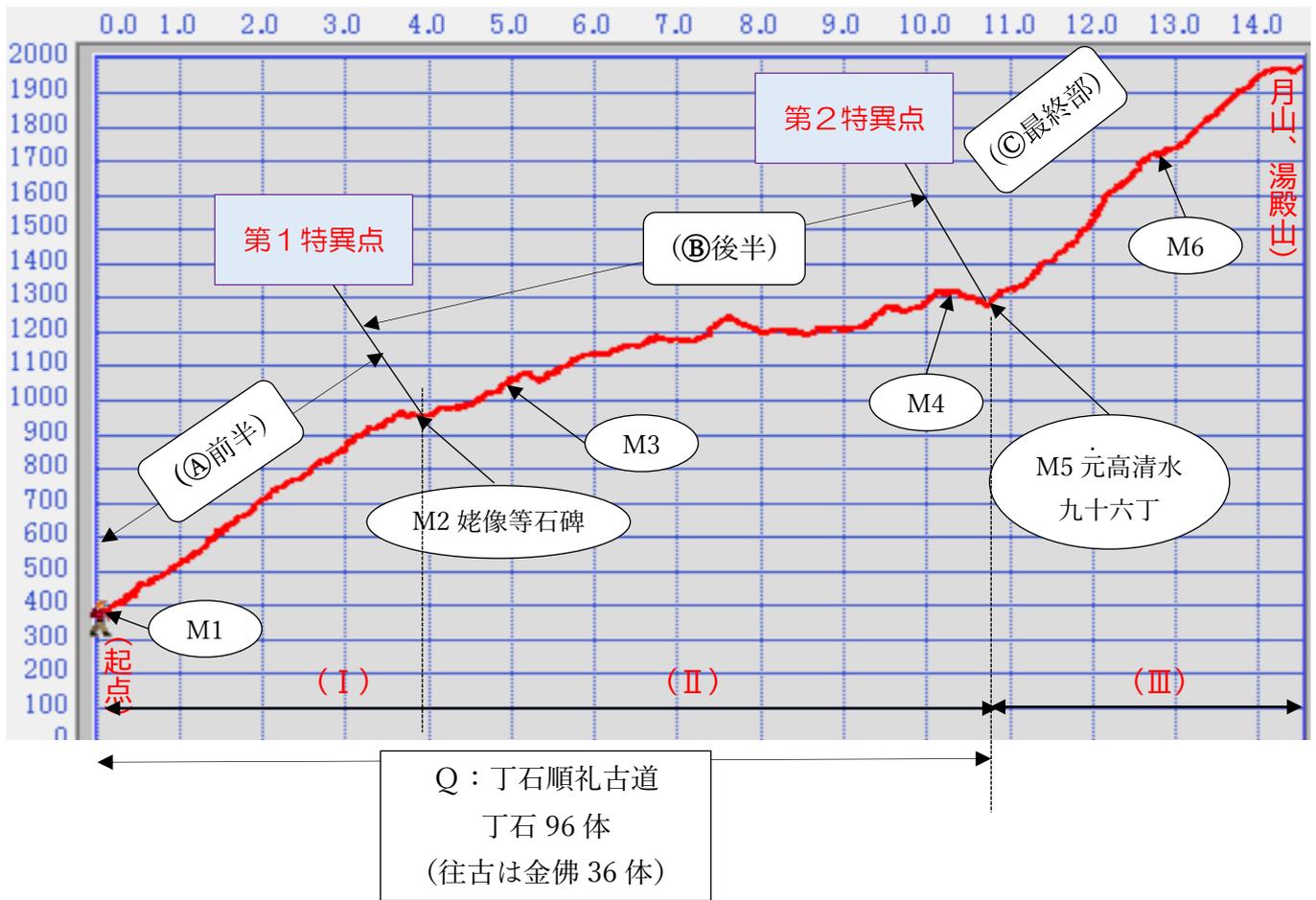


図 - 9

(2) 3ゾーンの意義／図(表)－10

※1は地理的3段階ゾーン、※2は精神面3段階ゾーンに対応する。

※1	※2	精神的修行の面
①	I	旧本道寺、文政五年建立起点記念碑から入った道者は、現世の今において、日常の身体的動作や振る舞い、不摂生を慎み健康保持等への気配りは如何ほどか？ と自問自答するゾーンである。そして、姥像等石碑群においては、貪毒（何でも欲しがらむさぼり）の有りや否やを、俗界・娑婆界に生きる人間としての自己存在感を総点検する一段階目の区切り点である。
②	II	これから全体傾斜は少し緩むが、アップダウンを繰り返しながら、心の表し方としての言葉使い・表現について、今までの過去を振り返ってどうだったのか？ 自問自答するゾーンである。そして、瞋毒（怒り、憎しみ）はとにかく醜いと誰もが恥じる毒であることに気付き、喜怒哀楽中の怒の制御をとくと省みる区間である。
③	III	ここからは登り一辺倒の急坂を喘ぎながら神域世界に没入することになる。そこから月山に向けて歩き始めた道者は、そこから湯殿山に向けて歩き始めた道者は、新しい自分に生まれ変わらんとする未来に向けて自問自答するゾーンである。身口意の三業の中で最も考えるべきものは、身・口を生み出す意（心）だが、湯殿の御宝前に手を合わせて、生まれた時のその瞬間に戻る・戻ったという真つさら 新な心を実感し、「清く・明るく・正しく」生きる誓いを立て、満願・結願を素直に喜ぶ三段目の区切り点である。ここで、新しい自分の生き方の原動力・推進力の種を吾が心に着床させたことになる、もう外れない。
図(表)－10		

4. ところで、「高清水小屋」（今でいう元高清水）の場所については、西川町史や何かの書籍には、姥像等石碑群の少し先とか、現高清水（水場）のあたりとかの記述が見えるが、間違っていたということになる。その記述当時は「起点記念碑と高清水小屋跡地（九十六丁石のある元高清水）」の存在を特定・認知していなかったからやむを得ない。

<end>